２０１５年6月１３日に第１６回大会が第３研究館にて開催されました。以下は、その時の個人研究発表の発表者のまとめと講演会のまとめです。

前回個人研究発表まとめ

「実証哲学あるいは実証主義における科学／社会：サン＝シモンとその弟子コントから」

野末 和夢（本学社会学研究科修士課程）

本発表は、クロード＝アンリ・ド・サン＝シモンとその弟子オーギュスト・コントの思想を、彼らがともに主張した「実証哲学」の側面から解釈し直し、十九世紀前半期のフランスにおける「科学」観と「社会」観の関係性についての一視座の提出を目指した。

十八世紀末から十九世紀初頭のパリでは自然科学の画期的成果が集結していた。その他方、ジャコバン主義秩序観に対抗して、国家と個人とを介在する「社会」の自律性が様々な立場の論者によって説かれていた。「科学」と「社会」とを巡る両潮流に乗りつつも、時にそれに対して批判的な立場から、十九世紀にふさわしい「哲学」を形成しようとした人物として、サン＝シモンおよびコントを本発表では位置づけた。

では、端的に「科学」と「社会」とは彼らの学説において一体どのようなものだろうか。その点について本発表では、彼らによる歴史学的・社会学的理解から説明した。彼らによれば、まず「宗教」とは「科学」と同じ機能を持つものと把握される。「宗教」から「科学」へといった「世俗化」のプロセスを「近代化」に見出すのではなく、「宗教」と「科学」を、「予見（prévoir）」という機能的レベルにおいて、イコールで結びつけることに彼らの特徴がある。経験主義的に事実の集積に没頭することや、現象に対する「客観的見地」を提出することなどは「科学」の営みではない。「科学」の営みとは他者との協働によって形成される、「主観的」営みであり、その意味において、かつての「宗教」と同質的機能を有している。ただし、彼らは「進歩」のスローガンに従って、具体的に（例えば）キリスト教カトリックの復権を目指すのではなく、「社会科学」「社会学」を発明し、自然科学の上位にそれを位置づけ、それら全体を「（実証）科学」として体系化する。その体系化の基準として定められたのが「実証哲学」であり、この「実証的」の意味については本発表前半部で詳しく整理した。

次に、彼らが「社会」という時、そこに想定されているのは、「精神」／「世俗」の縦割り分業関係に基づく、中世ヨーロッパの「レジーム」である。中世のローマ・カトリックがそうであったように、「世俗」は「精神」に従属するのであり、ここでも「科学」＝「精神」のポジションが重要になる。そして、「科学」という主観的見地の正当化は、民衆の形成する「世論」、より平素にいうのであれば、「科学」に対する「信頼」に依存している。とくにコントは、「科学」を媒介とした「信頼」の形成に、ヨーロッパレベルの「社会」再組織化の実質的契機を見出していることを本発表後半部で確認した。

質疑応答では、大変貴重なご指摘を多数頂けたことに感謝している。要約すれば、実際に自然科学・社会科学含む「科学」は（サン＝シモンらの言うように）「宗教」に取って代わることができるのか、という非常に本質的なご指摘を頂いた。「ヨーロッパ」の「精神」というレベルにおいて、また機能上、「科学」と「宗教」は同質的であると回答したが、真に迫る回答ではなかったことを反省している。コント

は後期以降、かつて科学知を強調していたのとは反対に、「愛」「情」「慈しみ」などを「宗教」に連なる、社会の根本的要素として詳述している。「科学」／「宗教」の関係性というテーマは、「人類教」が提唱されるコント後期思想の大テーマであるが、本発表ではサン＝シモン思想との関係上、深く立ち入らなかった。この点については、今後の課題とさせていただきたい。